水木洋子生誕100年

いちかわを愛した脚本家 水木洋子

「いつの間にか三十年、私は今までこんなに永く住んだ土地はない」と、水木洋子は市川に定住したことについて、晩年のエッセイに書いています。

水木邸には、今も近所の山口ラヂオ店に注文した電気蓄音機があります。一度に10枚のレコードをセットできる特注品です。新しいものが好きで店頭にあった洗濯機を最初に買ったのも水木でした。

また、「純愛物語」では、葛飾八幡宮や旧市立図書館周辺で撮影された場面が登場します。

「浮雲」「ひめゆりの塔」「キクとイサム」など日本映画史に残る数々の名作を手がけた脚本家、水木洋子は92歳で亡くなるまで、およそ半世紀を市川市で過ごしました。本人の遺志により、自宅や貴重な原稿が市に寄附されています。

生誕100年の今年は、上映会・書籍の出版など、多くのイベントや記念事業が行われました。作品はもとより、一人の女性として強く生きた生涯をたどり、市川を愛した脚本家水木洋子の魅力に触れてみませんか。

日本映画全盛期を飾った水木脚本の作品

せりふ回しの見事さ、確かな取材に裏打ちされたしっかりした構成で、作品の多くは戦後の日本映画黄金時代を飾りました。また映画化された脚本34本のほかに多くのテレビ、ラジオの脚本も書いています。

◆**おかあさん**(1952年)
監督:成瀬巳喜男
出演:田中絹代、香川京子
夫を亡くした後、クリーニング店を切り盛りする母の姿を娘の目から温かく描き、フランスでも高く評価された。

◆**ひめゆりの塔**(1953年)
監督:今井正
出演:津島恵子、岡田英次
綿密な取材のもと、沖縄戦で悲劇の最期を遂げたひめゆり部隊を題材に平和を訴えた。音楽に古関裕而。

◆**浮雲**(1955年)
監督:成瀬巳喜男
出演:高峰秀子、森雅之
原作:林芙美子。戦時中南方で愛し合った男女の壮絶な運命を描く。水木作品の最高傑作との呼び声も高い。

◆**純愛物語**(1957年)
監督:今井正
出演:江原真二郎、中原ひとみ
愛が芽生え、スリから足を洗おうと決めた若い2人。だが少女を原爆症が襲う。資料集めだけで5年をかけた力作。

◆**おとうと**(1960年)
監督:市川崑
出演:岸惠子、川口浩
原作:幸田文。厳しい両親に神経を使う姉と、ぐれてしまった弟の愛情あふれるやりとりが胸を打つ傑作。

テレビ作品 脚本

◆**竜馬がゆく**(1968年)
出演:北大路欣也、浅丘ルリ子
原作:司馬遼太郎。土佐弁や時代考証を綿密に行い、NHK大河ドラマとして放送された。途中から和田勉が演出を担当している。

水木洋子といちかわ

居間にある1954年製の電気蓄音機は修理され、現在もレコードを聴くことができる。

昭和30年代の本八幡駅前(駅から北側の商店街を望む)
昭和21年1月には、永井荷風や幸田露伴一家が移り住むなど、市川は戦災罹災者の移転先として都市化していった。

水木洋子「八幡は良い所です(仮題)」未発表自筆原稿　文頭から1986年(昭和61)以降と思われる

水木洋子が通っていた、JR本八幡駅近くにある文房具店
ウエダビジネス 上田 和子さん

「柄が気に入ったわ」と私製年賀はがきを買って行かれたのが、先生にお会いした最初です。万年筆のスペアインクもたくさん買っていただきました。そのうち私と主人には心を許してくださり、用事がなくても店に立ち寄って、いろんなことを話していかれました。はっきりと物を言う方でしたが、偉ぶることもなく、人に迷惑をかけないよう気遣いのある素晴らしい方でした。今でも、「あなたの店があるから助かっているのよ」との先生の言葉が懐かしく思い出されます。

市民サポーター「私たちも企画に参加しました」

水木洋子市民サポーターの会 会長 加藤 馨さん

現在50人の会員が、資料整理、水木邸の公開時の案内などを行っています。今年は生誕100年、かつ私たちの活動も10年目と大きな節目の年でしたが、書籍の発行など具体的な成果も残すことができました。水木作品の魅力はやはり、せりふの見事さですね。構成もしっかりしており、バイタリティを感じます。喜劇の才能にも素晴らしいものがありました。今後は映画だけでなく、テレビやラジオの台本の整理も進め、ゆくゆくはまとまった展示をしてもらいたいと思い描いています。

文学プラザに資料があります

ご本人の等身大パネルが迎えてくれる文学プラザには、水木洋子に関する資料がそろっています。生誕100年を記念した展示図録や、市民サポーターの会が企画編集したエッセイ集なども販売しています。ご利用ください。

鬼高1-1-4メディアパーク市川3階
☎320-3354

水木洋子略年譜

1910(明治43)年
8月25日、東京市京橋区本材木町3の5(現在の中央区京橋1の17)に生まれる。本名・高木富子。父親は鉄屋街の豪商の一番番頭だった。

1911(明治44)年 1歳頃

1928(昭和3)年
日本女子大学校国文学部に入学。

1931(昭和6)年
21歳。もっと自由に演劇を学ぼうと、文化学院文学部専攻科演劇科に転校。プロレタリア演劇研究所にも通い、戯曲や小説を書き始める。

1932(昭和7)年
文化学院を卒業し、左翼劇場文芸部に入る。

1917(大正6)年頃 町内の人々と
前列中央 父艶五郎 その右妹文子と水木

豪放で芝居好きの父
高木艶五郎(つやごろう)

1934(昭和9)年
24歳。父艶五郎死去。家族を支えるため、筆一本で生きる決意を固める。

1935(昭和10)年
菊池寛主宰の脚本研究会に入会。

1937(昭和12)年
27歳。「白き一頁」が新派によって明治座で上演され、プロとして歩み始める。

1938(昭和13)年
28歳。12月、東宝の助監督・谷口千吉と挙式。翌年10月に協議離婚している。

1941(昭和16)年
日本放送協会放送劇部門嘱託となる。

1942(昭和17)年
陸軍省嘱託として、林芙美子ら女流作家と南方へ派遣される。

1944(昭和19)年
妹の文子死去。

1946(昭和21)年
戦後第一作目となる脚本「星の夜なら」(劇曲)を発表する。

1916(大正5)年
妹文子3歳 七五三の祝い

1947(昭和22)年
37歳。6月頃、父親の知り合いを頼って、母親と市川市八幡町1880佐藤家に転居する。

1948(昭和23)年
八幡758(現在の八幡5丁目17の3)に移る。

1949(昭和24)年
映画脚本デビュー作となる「女の生」が東宝で封切りになる。

1950(昭和25)年
「また逢う日まで」(今井正監督)封切り。

1952(昭和27)年
「おかあさん」(成瀬巳喜男監督)封切り。

1953(昭和28)年
「ひめゆりの塔」「ひとりえ」(両作品とも今井正監督)封切り。
第1回菊池寛賞を受賞。

1955(昭和30)年
「浮雲」(成瀬巳喜男監督 原作 林芙美子)封切り。

1959(昭和34)年
「キクとイサム」(今井正監督)封切り。

1952年(昭和27)「ひめゆりの塔」のセットで今井正と

1960(昭和35)年
50歳。「おとうと」(市川崑監督)封切り。前年の仕事が評価され数々の賞を総なめに。

1968(昭和43)年
58歳。NHK大河ドラマ「竜馬がゆく」(司馬遼太郎原作)。

1974(昭和49)年
テレビドラマ「灯の橋」(CBC)が芸術祭大賞を受賞。

1981(昭和56)年
「ひめゆりの塔」リメイクのため取材で沖縄を訪れる。「はまなすの花が咲いたら」(TBS)放映。これが最後のテレビドラマの脚本となる。11月、紫綬褒章受章。

1983(昭和58)年
73歳。母ゑい死去。

1985(昭和60)年
日本シナリオ作家協会のシナリオ功労賞を受賞。

1987(昭和62)年
勲四等宝冠章受章。

1993(平成5)年
83歳。自宅を離れ、療養生活に入る。

1996(平成8)年
市に将来一切の財産を寄贈する契約を結ぶ。

2002(平成14)年
水木洋子市民サポーターの会設立。

2003(平成15)年
4月8日、市内の病院で死去。92歳。両親、妹と共に台東区海禅寺に眠る。

2004(平成16)年
市川市水木洋子文化基金設立。名誉市民に選出される。

紫綬褒章受章の日 母ゑいと